ヘリコバクター・ピロリ抗体価と胃画像診断の関連性

～10,197 人の追跡調査結果の分析～

◎加藤 修[1)]、市川 浩巳[1)]、中村 朱里[1)]、長﨑 栞菜[1)]、和田 恒之[1)]
北海道対がん協会 細胞診センター[1)]

【目　的】H･ピロリ抗体検査(以下ピロリ検査)結果と胃内視鏡診断およびX線バリウム判定との関連性を知る目的でピロリ検査実施者の追跡調査結果を分析したので報告する.

【対象・方法】2016 年 4 月から 2018 年 3 月の 2 年間にピロリ検査(LZ テスト栄研)を実施した 10197 人(男性 2621 人,女性 7576 人),年齢中央値 64 歳(17～97 歳)を対象とした.

結果は陰性(抗体価 3U/ml 未満),陰性高値(3～9U/ml),陽性(10U/ml 以上)とし,陽性を H･ピロリ除菌対象とした.

H･ピロリ抗体価の年齢･性別分布,内視鏡診断を調査した.同時に X 線バリウム検査(以下 X 線検査)による胃がん検診を受診していた 6893 人の成績を調査した.

【結　果】ピロリ検査陰性 5657 例(55.5%),陰性高値 1560 例(15.3%),陽性 2980 例(29.2%).陽性率に性差はないが,49 歳以下 16.9%,60 歳以上 34.6%と年齢差がある.

内視鏡検査は 557 例に実施し,19 例の胃がんを発見していた.ピロリ検査は陽性 16 例(84.2%),陰性高値 3 例(18.8%)である.抗体価中央値は 32U/ml であるが深達度 SS/SE の進行がんでは 5 例中 2 例が陰性高値であった.他病変(陽性率,抗体価中央値)は胃炎 340 例(80.0%,27U/ml),胃潰瘍 41 例(68.3%,22U/ml),ポリープ 56 例(26.8%,3U/ml 未満),粘膜下腫瘍 9 例(22.2%,8U/ml),食道・十二指腸病変 35 例(48.6%,8U/ml),異常なし 57 例(49.1%,8U/ml)である.

X 線検査実施者 482 例(要精検 276,精検不要 206)に内視鏡検査を実施していた.要精検例から胃がん 14 例を発見しているが,ピロリ検査結果は陽性 11 例,陰性高値 3 例であった.

精検不要例から胃がん 5 例を発見していたが全例ピロリ検査陽性で除菌治療受診時の内視鏡検査で発見されていた.

【まとめ】H･ピロリ抗体価は胃粘膜炎症の程度を反映することが報告されているが,症例分析から胃がん,胃炎,胃潰瘍は抗体価が高い症例が多く,画像診断との関連性が確認できた.これら病変で抗体価が低い症例は胃粘膜の萎縮が進み H･ピロリが生息できない環境となったことが要因と考える.

ピロリ検査は除菌対象者を内視鏡検査へ導くことで胃がんを発見できることから胃がん検診未受診者対策としても効果がある.

連絡先：TEL011-748-5523